

2022（令和4）年度 研究所報告

1. 組織

所長	江森 英世
主事	藤元 雅文
委員	采翠 晃（大学院研究科長）
	山内 美智（教育研究支援部事務部長）
	岡田 治之（教育研究支援課長）
	井上 尚実（教授・真宗学（仏教学／宗教学））
	Dash Shobha Rani（教授・インド学／仏教学／貝葉写本研究／インドの古典芸能）
	福島 栄寿（教授・近代日本仏教史／近代日本思想史）
	古川 哲史（教授・歴史学（日本／アメリカ／アフリカ）／比較文化、社会学）
	三宅伸一郎（教授・チベット学）
	村山 保史（教授・西洋哲学／日本哲学）
	西本 祐攝（准教授・真宗学）
	本明 義樹（講師・真宗学）

2. 研究組織

〔特定研究〕

Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開

研究課題	eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入
研究代表者	一楽 真（学長・教授・真宗学）
研究員	箕浦 暁雄（教授・仏教学）
	酒井 恵光（准教授・計算機科学（グラフィカルユーザーインターフェイス））
	戸次 顕彰（講師・仏教学）
	本明 義樹（講師・真宗学）
嘱託研究員	難波 教行（真宗大谷派教学研究研究所研究員）
	松下 俊英（真宗大谷派教学研究研究所助手）

〔指定研究〕

国際仏教研究

研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
研究代表者	井上 尚実

- 研 究 員 井上 尚実（教授・真宗学（仏教学／宗教学））
 Dash Shobha Rani（教授・インド学／仏教学／貝葉写本研究／インドの古典芸能）
 松浦 典弘（教授・東洋史）
 箕浦 暁雄（教授・仏教学）
 松川 節（教授・人文情報学／東洋史学）
 アマ ミチヒロ（准教授・アメリカ宗教・文化／国際日本学）
 Michael J. Conway（准教授・真宗学）
 新田 智通（准教授・仏教学（インド））
- 嘱託研究員 James C. Dobbins（オーバーリン大学名誉教授）
 Robert F. Rhodes（EB誌編集長、本学名誉教授）
 下田 正弘（東京大学教授）
 Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
 John LoBreglio（EB誌編集者、オックスフォード・ブルックス大学准教授）
 羽田 信生（毎田周一センター所長）
 Wayne S. Yokoyama（花園大学元講師）
 三鬼 丈知（本学非常勤講師）
 大西 和彦（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）
- 研究補助員（RA） 千葉 一生（博士後期課程第3学年）
 Woo Jongin（博士後期課程第2学年）

西藏文献研究

- 研究課題 チベット語文献のデータベース化
 研究代表者 三宅伸一郎
 研究員 三宅伸一郎（教授・チベット学）
 上野 牧生（准教授・仏教学）
 松川 節（教授・人文情報学／東洋史学）
- 嘱託研究員 伴 真一郎（2021年度西藏文献研究嘱託研究員）
 U. エルデネバト（モンゴル国立大学教授）

清沢満之研究

- 研究課題 清沢満之の生涯と思想の研究—西方寺所蔵文献の研究—
 研究代表者 西本 祐攝
 研究員 西本 祐攝（准教授・真宗学）
 西尾 浩二（講師・西洋哲学）
- 嘱託研究員 福島 栄寿（本学教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
 名畑直日児（真宗大谷派教学研究研究所研究員）

研究補助員 (RA) 山雄 優生 (博士後期課程第2学年)

大谷大学所蔵仏教写本研究

研究課題 パーリ語貝葉写本の研究—保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に—

研究代表者 Dash Shobha Rani

研究員 Dash Shobha Rani (教授・インド学／仏教学／貝葉写本研究／インドの古典芸能)

新田 智通 (准教授・仏教学 (インド))

戸次 顕彰 (講師・仏教学)

嘱託研究員 Suchada Srisetthaworakul (古典写本研究センター・センター長〈タイ・アユタヤ〉・マヒドン大学講師)

東京分室指定研究

研究課題 宗教と社会の関係をめぐる総合的研究—現代社会における宗教と共生—

研究代表者 福島 栄寿

研究員 福島 栄寿 (教授・近代日本仏教史・近代日本思想史)

荻 翔一 (PD 研究員・宗教社会学)

陳 宣聿 (PD 研究員・宗教学)

磯部 美紀 (PD 研究員・社会学)

澤崎 瑞央 (PD 研究員・仏教学)

[資料室]

大谷大学史資料室

研究課題 大学史関係資料の収集・整理

室長 藤元 雅文 (研究所主事・准教授・真宗学)

デジタル・アーカイブ資料室

研究課題 大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長 藤元 雅文 (研究所主事・准教授・真宗学)

嘱託研究員 川端 泰幸 (博物館主事・准教授・日本中世史)

[一般研究／共同研究]

研究課題 変動帯の文化地質学

研究代表者 鈴木 寿志

研究員 鈴木 寿志 (教授・文化環境学)

廣川 智貴 (教授・ドイツ文学／文化)

- 協同研究員 清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
- 研究課題 歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究
- 研究代表者 武田 和哉
- 研究員 武田 和哉（教授・歴史学／考古学／人文情報学）
三宅伸一郎（教授・チベット学）
- 協同研究員 吉川 真司（京都大学大学院教授）
渡辺 正夫（東北大学大学院教授）
矢野健太郎（明治大学大学院教授）
江川 式部（國學院大学准教授）
横内 裕人（京都府立大学教授）
鳥山 欽哉（東北大学大学院教授）
等々力政彦（埼玉県立自然の博物館任期制学芸員）
佐藤 雅志（東北大学大学院学術研究員）
清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
水谷 友紀（京都府立大学非常勤講師）
- 研究課題 新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究
- 研究代表者 福島 栄寿
- 研究員 福島 栄寿（教授・近代日本仏教史／近代日本思想史）
- 協同研究員 知名 定寛（神戸女子大学名誉教授）
長谷 暢（真宗大谷派沖縄別院職員・法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
川邊 雄大（日本文化大学専任講師）
松金 直美（真宗大谷派教学研究員）
- 研究課題 モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究
- 研究代表者 松川 節
- 研究員 松川 節（教授・人文情報学／東洋史学）
三宅伸一郎（教授・チベット学）
- 協同研究員 小野 浩（京都橘大学元教授）
- 研究協力員（支援） ARILDII BURMAA（2021年度松川班研究協力員（支援））
- 研究課題 中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究
- 研究代表者 Michael J. Conway

- 研究員 Michael J. Conway (准教授・真宗学)
 協同研究員 斎藤 隆信 (佛教大学教授)
 宮井 里佳 (埼玉工業大学教授)
 大西磨希子 (佛教大学教授)
 研究協力員(支援) 三池 大地 (2021年度コンウエイ班研究協力員(支援))
- 研究課題 人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究
 研究代表者 木越 康
 研究員 木越 康 (教授・真宗学/宗教学)
 東館 紹見 (教授・日本仏教史(古代・中世))
 藤枝 真 (教授・宗教学/哲学)
 徳田 剛 (准教授・地域社会学/社会学理論/宗教社会学/専門社会調査士)
 藤元 雅文 (准教授・真宗学)
 野村 実 (講師・社会学(地域社会学/地域政策))
 協同研究員 齊藤 仙邦 (東北福祉大学教授)
 萩野 寛雄 (東北福祉大学教授)
 本林 靖久 (本学非常勤講師・特別研究員)
 阿部 友香 (佐久大学講師)
 磯部 美紀 (東京分室 PD 研究員)
- 研究課題 健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知—非認知能力の測定
 研究代表者 江森 英世
 研究員 江森 英世 (教授・数学教育学)
 協同研究員 竹村 景生 (天理大学教授)
- 研究課題 支援が必要な子どもと親のための光・音・匂いを用いた『親子の遊び空間』の開発
 研究代表者 井上 和久
 研究員 井上 和久 (教授・特別支援教育)
 協同研究員 大久保圭子 (大和大学教授)
- 研究課題 九州沖繩仏教史・真宗史に関する基礎的研究—新出資料・布教ネットワーク・潜伏宗教—
 研究代表者 福島 栄寿
 研究員 福島 栄寿 (教授・近代日本仏教史/近代日本思想史)

協同研究員 知名 定寛（神戸女子大学名誉教授）
 川邊 雄大（日本文化大学専任講師）
 長谷 暢（真宗大谷派沖繩別院職員・法政大学沖繩文化研究所国内研究員）
 松金 直美（真宗大谷派教学研究員）

研究課題 勸修寺資料からみた文庫の形成・維持に関する総合的研究—新たな寺院文化論として—

研究代表者 佐藤 愛弓
 研究員 佐藤 愛弓（准教授・国文学）
 協同研究員 上島 享（京都大学大学院教授）
 藤原 重雄（東京大学史料編纂所准教授）
 三好 俊徳（佛教大学准教授）

〔一般研究／個人研究〕

研究課題 嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究

研究代表者 池永 真義（准教授・美術教育学）

研究課題 世親作『釈軌論』の総合的研究

研究代表者 上野 牧生（准教授・仏教学）

研究課題 東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明

研究代表者 清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員）

研究課題 『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明

研究代表者 渡邊 温子（特別研究員）

研究課題 認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開—「主体」論を超えて

研究代表者 翁 和美（特別研究員）

研究課題 タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響

研究代表者 西川 幸余（准教授・英語教育／英米文化）

研究課題 生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討

研究代表者 岡部 茜（講師・社会学／社会福祉学）

- 研究課題 Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English
研究代表者 Ryan W. Smithers (准教授・外国語教育／言語学／英米文化)
- 研究課題 日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究
研究代表者 徳田 剛 (准教授・地域社会学／社会学理論／宗教社会学／専門社会調査士)
- 研究課題 キンギョから見る知覚統合の進化的基盤
研究代表者 高橋 真 (准教授・比較認知科学)
- 研究課題 民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望
研究代表者 田中 正隆 (准教授・社会学／社会人類学／民俗学／アフリカ地域研究／専門社会調査士)
- 研究課題 社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究
研究代表者 中野加奈子 (准教授・社会福祉学 (社会福祉援助技術論／貧困問題／医療福祉／生活史研究))
- 研究課題 『四六文章図』研究—日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐって—
研究代表者 上原 尉暢 (本学非常勤講師・特別研究員)
- 研究課題 地方社会の解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の展開と課題
研究代表者 西村 雄郎 (特別研究員)
- 研究課題 アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究
研究代表者 井黒 忍 (准教授・東洋史 (中国近世史／環境史))
- 研究課題 新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究
研究代表者 大原 ゆい (准教授・社会学)
- 研究課題 南インドの仏教受容に関する図像学的研究：カナガナハリ大塔を手がかりに
研究代表者 中西麻一子 (任期制助教・仏教学 (インド)／仏教美術史 (イン

ド）・特別研究員)

- 研究課題 戦後日本の国際法学者による朝鮮問題の法理論争
研究代表者 鄭 祐宗（准教授・歴史学）
- 研究課題 中山間地域のモビリティ確保策に関する比較研究
研究代表者 野村 実（講師・社会学（地域社会学／地域政策））
- 研究課題 戦国期の誓約をめぐる社会史的思想史的研究
研究代表者 山本 春奈（本学非常勤講師・特別研究員）
- 研究課題 維新时期における東本願寺の破邪論とキリシタン—樋口龍温の未公開史料の分析と公開—
研究代表者 狭間 芳樹（本学非常勤講師・特別研究員）
- 研究課題 真宗地域における葬墓制と他界観に関する民俗学的研究
研究代表者 本林 靖久（本学非常勤講師・特別研究員）
- 研究課題 現代宗教と胎児生命観の変容：日本と台湾の「プロライフ運動」を通して
研究代表者 陳 宣聿（PD研究員・宗教学）
- 研究課題 集合的なニーズ・権利に関わるグローバルな正義の比較社会学的研究
研究代表者 阿部 利洋（教授・社会学）
- 研究課題 植民地期前後における日朝間美術交流について
研究代表者 喜多恵美子（教授・韓国／朝鮮美術）
- 研究課題 南丹地域の歴史史料を活用した地域文化の発信と継承に関する研究
研究代表者 川端 泰幸（准教授・日本中世史）
- 研究課題 19世紀末～20世紀初頭ドイツ帝国海軍におけるコマンド・テクノロジーの実態の解明
研究代表者 前田 充洋（講師・近代ドイツ史／日独関係史／ドイツ企業史／広義の軍事史）
- 研究課題 国際移民のホームランド維持に関する研究：中国朝鮮族移民による

母村への遠隔地参加

研究代表者 許 燕華（任期制助教・社会学／東アジア地域研究・特別研究員）

研究課題 日本人学習者のための韓国語発音教案開発—語頭平音の音響音声学的考察を中心に—

研究代表者 平田 絵未（任期制助教・韓国語韓国文学／言語学・特別研究員）

研究課題 中国近世における儒・仏・道三教の死者儀礼と明朝宗教政策との関連について

研究代表者 濱野 亮介（本学非常勤講師・特別研究員）

研究課題 9～13世紀の北アジア諸民族国家における多民族共生社会成立の歴史考古学的総合研究

研究代表者 高橋 学而（特別研究員）

研究課題 フランス人格主義を基点とした「人格の完成」の再検討—道德教育との関連もふまえて—

研究代表者 寺川 直樹（講師・教育学）

研究課題 現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究

研究代表者 荻 翔一（PD研究員・宗教社会学・特別研究員）

研究課題 タイ国で発展した積徳行文献に基づく蔵外仏典の研究

研究代表者 清水 洋平（本学非常勤講師・特別研究員）

研究課題 イェルムスレウ言語論からみた20世紀後半フランス思想の研究

研究代表者 平田 公威（任期制助教・西洋哲学）

研究課題 日系オーストラリア文学の可能性を考察する—第二次世界大戦時強制収容体験を中心に—

研究代表者 古川 拓磨（任期制助教・日系英語文学・特別研究員）

研究課題 「説得」をめぐるパスカルの思想と方法の総合的研究

研究代表者 鈴木真太郎（任期制助教・フランス文学・思想／フランス語圏文化／外国語教育・特別研究員）

研究課題 個人化社会の葬儀における僧侶介在に関する宗教社会学的研究—法話に注目して—

研究代表者 磯部 美紀（PD 研究員・社会学・特別研究員）

研究課題 乳児の物の受け取り動作の成立過程を共同注意の枠組みから解明する
関係論的発達研究

研究代表者 脇中 洋（教授・発達心理学／法心理学）

〔PD 個人研究〕

研究課題 現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究—1960
年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して—

研究代表者 荻 翔一（PD 研究員・宗教社会学）

研究課題 現代社会における宗教と胎児生命観の研究

研究代表者 陳 宣聿（PD 研究員・宗教学）

研究課題 現代日本における葬送儀礼と僧侶に関する研究—首都圏の事例を中心
に—

研究代表者 磯部 美紀（PD 研究員・社会学）

研究課題 中国仏教における不退転の概念内容の解明

研究代表者 澤崎 瑞央（PD 研究員・仏教学）

3. 指定研究の動向

E ラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開

大谷大学は開学以来、仏教および真宗の学びを一般社会へと広く公開していくことを理念として教育活動を展開してきた。「E ラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開」研究班は、近年の情報化社会に相応する形で、本学の理念をより積極的に展開することを目的としている。そこで本研究班は、これまで学習機会を得ることができなかった遠近各地のより広い受講者を対象とし、仏教・真宗を学ぶ機会を提供できるよう、特にインターネットを活用した仏教教育機会の提供システムを研究・開発し、その導入に向けて取り組んできた。

研究活動の概要

2020・2021 年度と継続して、E ラーニングの実施に必要なコンテンツ、システム、運用体制の確立を課題として取り組んできた。そして最終年度である本年度は、①「仏教入門」講座の撮影と編集、②公開配信に向けた課題の検討を中心に研究活動を行った。

①「仏教入門」講座の撮影と編集

コンテンツ面においては、全9回の構想のもと、釈尊の生涯と思想をテーマにした仏教入門講座の完成を目指した。その上で特に、仏教入門に適した『改訂大乘の仏道—仏教概要—』（東本願寺出版、2016年）および同『資料編』（同、2019年）をもとに、コンテンツ開発を行った。「仏教入門」講座として、以下の全9回の講義によって構成した。

第1回はじめに	講義担当：本学教授	木越 康
第2回仏教成立の時代背景	講義担当：本学教授	箕浦 暁雄
第3回青年ゴータマの歩み	講義担当：本学教授	箕浦 暁雄
第4回沙門となったゴータマ	講義担当：教学研究所助手	松下 俊英
第5回回苦の原因をたずねて	講義担当：教学研究所助手	松下 俊英
第6回最初の説法	講義担当：本学教授	箕浦 暁雄
第7回仏弟子の誕生	講義担当：本学講師	戸次 顕彰
第8回釈尊の入滅	講義担当：本学講師	戸次 顕彰
第9回おわりに	講義担当：本学教授	一楽 真

以上のように全9回にそれぞれ担当者を配当し、各自が原稿を作成し、それを全体研究会の俎上に載せ、内容について討議を重ね、講義原稿を完成させていった。また写真や地図を持ち寄り、キーワードの提示や紹介する仏典の文章・言葉を検討した。そして、それらを適宜、講義映像に取り込んでいく作業を、プレゼンテーションツールであるパワーポイントを活用するなどして視聴覚教材としてのメリットを生かせるよう配慮した。その上で、準備の整ったものから順次撮影を行うこととし、2021年度には、10月に第1回、12月に第7回、2022年3月に第6回の計3回分、そして本年度は、6月に第3回と第5回、7月に第8回、10月に第6回、2023年1月に第2回、そして2月に第9回の6回分の撮影を行い、全9回の収録を終え、随時編集作業を行った。

②公開配信に向けた課題の検討

さらに実運用開始に向けた体制について検討した。システム面においては、既存プラットフォームを活用した「仏教入門」講座の配信の実装を進めるため、諸機関と連携し課題の共有に努めた。また実際の公開を想定し、広報や申し込み方法、さらには、各回に設けられたQ&Aの受信返信方法などについて協議を行った。しかし、今後の大学内での安定的運用については課題も多く、引き続き関係部署が協力連携して運用体制を構築していく必要性を確認した。

「真宗入門」に関しては、仏教教育センターや真宗学科の教員が連携して、継続的に撮影から配信までを実施できるような体制を構築しなくてはならない。そのためにも本研究班で確立したコンテンツ開発、撮影方法、システム構築を基に、それらを十分活用した上で、公開に向けた準備、撮影を行う必要がある。

今後も継続してEラーニングによる教育機会提供の体制を整えることで、大学全体における新しい教育システムの構築へとつながることが期待される。

国際仏教研究

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。2020年度以来、新型コロナウイルスの感染拡大（COVID-19）により、国際的な研究活動は大きな影響を被ってきたが、2022年度になって状況は少しずつ改善し、国際学会やワークショップ参加のための海外渡航も夏頃から可能になってきた。そのような中で欧米班とアジア班は、それぞれ下記のようなテーマを掲げて研究活動を進めた。

- ①欧米班：「真宗を中心とした仏教研究動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する」
- ②アジア班：〈中国〉「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院古代史研究所との共同研究。〈ベトナム〉『日本仏教概説』の出版。

以上のようにテーマ掲げたが、いまだに残っている COVID-19 の影響のため、一部の計画については変更を余儀なくされた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

〈欧米班〉

①国際学会への参加

2022年11月にアメリカ合衆国コロラド州デンバーで開かれたアメリカ宗教学会（AAR）において、以下のようにEBS設立100周年記念パネル発表を行なった。

テーマ：“The Eastern Buddhist Society: Past and Future”（EBSの過去と未来）

パネリスト：日沖直子（南山大学研究員）、マイケル・コンウェイ研究員（EBS内部顧問）、マーク・ウンノ（オレゴン州立大学教授）、ジョン・ロブレグリオ囑託研究員（EB誌編集者）。

AARとEBS100周年記念パネルの詳細については本所報掲載の参加報告を参照。

②翻訳研究

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』翻訳研究ワークショップを継続的に開催した。

2022年度は久しぶりに対面での実施が可能となり、COVID-19の影響で開催できなかった分の遅れを取り戻すために9月に1回を加え、以下の3回のワークショップが実施された。

1) 第8回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

8月5日（金）～7日（日）大谷大学

2) 第9回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

9月2日（金）～4日（日）カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所

3) 第10回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

2023年3月10日（金）～12日（日）カリフォルニア大学バークレー校（会場は浄土真宗センター）

このワークショップの詳細については、『研究所報』82号18～19頁掲載の参加報告を参照。

③国際シンポジウムの成果出版

Adding Flesh to Bones: Kiyozawa Manshi's Seishinshugi in Modern Japanese Buddhist Thought. Edited by Mark L. Blum and Michael Conway (University of Hawaii Press, 2022.4.30)

すでに『研究所報』80号にその表紙写真とともに概要を報告したが、2015年に開催された *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*. Edited by Mark L. Blum and Robert F. Rhodes (SUNY Press, 2011) 出版記念シンポジウムの成果が、マーク・L・ブラム嘱託研究員(カリフォルニア大学バークレー校教授)とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集によりハワイ大学出版から本年4月30日に出版された。2人の編者によって付けられた *Adding Flesh to Bones* という書名は「骨〔骸骨〕に肉付けをする」という意味であり、本書は真宗近代教学の英訳基礎研究としての *Cultivating Spirituality* に対して、内外の近代真宗教学に関する最新研究の成果によって肉付けを行なっている。17本の論文から成る490頁の重厚な学術書であり、*Cultivating Spirituality* と合わせて英語圏における近代浄土真宗研究の記念碑的な成果である。

④国際シンポジウムの企画と準備

2023年12月15日(金)～17日(日)に本学を会場に開催予定の“Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions”(世界の諸宗教における悟りと智慧と変容)をテーマとするシンポジウムの企画立案と準備を進めた。この国際シンポジウムは、もともと2017年度に大谷大学が「仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進」という5カ年プロジェクトにより文部科学省「私立大学研究ブランディング」事業(タイプB:世界展開型)に選定された折、その最終年である2021年に開催が計画されていたもので、その後「私立大学研究ブランディング」事業そのものが文部科学省の不祥事により2019年度で打ち切られたため、本学の近代化120周年記念事業として開催することが決まっていた。しかしCOVID-19の影響で開催が延期されてきたという経緯がある。COVID-19の世界的な感染状況が改善して開催の見通しが立ったため、2023年の12月中旬の3日間、ハンガリーの学術交流協定校ELTEの研究者を含む内外の仏教・キリスト教・イスラム教・ユダヤ教・マニ教など諸宗教の研究者の招聘するシンポジウムの具体的な計画を進めた。

⑤東方仏教徒協会の事業

2021年の東方仏教徒協会(The Eastern Buddhist Society)設立100周年を機に、英文仏教学術誌 *The Eastern Buddhist* は *The Third Series* をスタートさせたが、2022年度はそのVolume 2, Number 1とNumber 2の2冊を発行した。Number 2の巻頭にはジェームズ・ドビズ嘱託研究員(オーバーリン大学名誉教授)による“D. T. Suzuki: A Brief Account of His Life”(「鈴木大拙小伝」全83頁)が掲載されている。

これは詳細な参考文献リストを含む最新の伝記研究である。

⑥オンラインによる公開講演会

COVID-19の影響により2020年度2021年度と2年続けて国際仏教研究の公開講演会を開催することができなかつたため、今年度は東方仏教徒協会の *The Eastern*

Buddhist 誌の編集とリンクする形で、以下のように3回のオンライン Zoom 配信による公開講演会を開催した。

1) 第1回 EBS 公開講演会（5月31日）

講師：Jørn Borup（デンマーク、オーフス大学宗教学部准教授）

講題：“Who Owns Buddhism? Postcolonialism, Decolonialization and the Study of Religion”（仏教は誰のものか？ポストコロニアリズム、脱植民地化と宗教研究）

2) 第2回 EBS 公開講演会（12月6日）

講師：Lucia Dolce（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授）

講題：“What Is Japanese Medieval Buddhism?: New Perspectives from Tantric Ritual Material”（中世日本仏教とは何か：タントラ儀礼資料による新たな視座）

3) 第3回 EBS 公開講演会（2023年2月22日）

講師：James C. Dobbin（オバーリン大学名誉教授）

講題：“The Many Faces of D. T. Suzuki”（鈴木大拙の多面性）

第1回のヨン・ボルプ先生の講演については『研究所報』81号24～25頁の報告を参照。第2回と3回の詳細については『研究所報』82号22頁（第2回）・24頁（第3回）の報告を参照。なお、第1回と3回講演のZoom録画データはThe Eastern Buddhist Society ウェブサイトのLECTUREのページにアップロードされているのでオンラインで視聴できる。〈<https://ebs.otani.ac.jp/pg1424.html>〉

⑦「女性と仏教」に関連する国際的研究交流

2019年度に本学で開催した「女性と仏教」をテーマとする国際ワークショップに続き、COVID-19の影響の中において可能な限り国際的な研究交流を継続した。「女性と仏教」をテーマとする国際的研究のデータベースを構築し、将来的にインターネットで公開することを念頭にデータの収集とインプットを継続した。

〈アジア班〉

I. 中国社会科学院古代史研究所との学術交流協定に基づく研究活動

本年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、相互の訪問による公開研究会を開催することができなかった。なお、2015年12月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果としての論文集について、翻訳作業を進めており、来年度に刊行予定である。

II. ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

『日本仏教概説』出版に向けた作業を行った。Pham Thi Thu Giang氏が日本語原稿の翻訳作業を行い、なお継続作業中である。なお、新型コロナウイルス感染症の影響により、十分な相互訪問はかなわなかったが、2023年3月1日にはPham Thi Thu Giang氏が来訪され、大西和彦嘱託研究員と共に、原稿の校正や出版に向けての詰めの協議を行った。

西藏文献研究

本研究は、本学に所蔵される多数のチベット語文献のうち特に重要と思われる文献資料を(1)専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること(2)なかでも貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開することを目的としている。2022年度は、2019年度からの3ヶ年の間に実施した研究のうち、成果が未完のままとなっていたものを完成させることに専念した。そのうちの一つは、『プトン仏教史』第1章の校訂テキストの刊行である。14世紀を代表する学僧であり、チベット仏教史上重要な役割を果たしたプトン・リンチェンドゥブ(Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)による本書の第1章は、仏教における「法」の定義や、膨大な経典の分類、聴聞や講説の方法などを記した「仏教概説」であり、チベット仏教における規範的な仏道のありようを知る上で極めて重要なテキストである。校訂テキストの原稿は2021年度中に整っていたが、最終的な確認・校正作業を行い2022年6月30日に下記のタイトルで刊行した。

Bu ston's Introduction to Buddhism: A Critical Edition of First Chapter of the Bu ston chos 'byung.

刊行にあたっては、本学図書館所蔵のタシルンポ(bKra shis lhun po)版(no. 11841)をはじめ合計7種の版本・写本を校合に用いた校訂テキストに加え、第1章の詳細な科文を付し、160余にわたる引用箇所を典拠を示した。また、第1章の概要と、そこに見られる特徴(特に世親『釈軌論(Vyākhyāyukti)』に依拠することにより、声聞乗の思想を吸収している点)、校合作業から見えてきた各写本・版本の系統関係に関する試論をまとめた序文を付した。

もう一つ未完であった、モンゴル国立大学との共同研究第2期(2016-2018年度)の研究報告書については、報告要旨の翻訳も含め原稿も全て整い、年度内刊行の予定で入稿した。しかし、モンゴル語の表記に用いられるキリル文字の組版にトラブルが生じ、その解決のためには膨大な作業が必要となったため、残念ながら、年度内に刊行することができなかった。以上の研究作業に加え、2021年度からの継続として『モンゴル仏教史・宝の数珠』の訳注作成を行った。この作業は、伴真一朗嘱託研究員によって行われ、その成果は『真宗総合研究所研究紀要』(40)に掲載されている。

清沢満之研究

■はじめに

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進めることを目的に、その研究において重要な意義を有する西方寺所蔵清沢満之自筆文献(以下、西方寺所蔵文献と略)についての研究を行っている。

本研究では西方寺所蔵文献の影印(36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超)を所蔵している。これは、1998年度から西方寺の全面的な協力をいただき、西方寺所蔵文献の蔵書整理、文献調査、調査カードの作成、文献目録作成、写真撮影、内容精査等を行ってきたことによる。

それらのうち、現在、『清沢満之全集』（以下、『全集』と略）及び『全集』別巻等で公開済の文献はその3分の1程である。これは、『全集』及び別巻が主に清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之が受講した講義ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。

未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれており、帝国大学時代については「真宗学」「仏教学」「歴史学」「哲学」「生理学」「儒学」「数学・化学」「心理学」「語学」「和文学」等の受講ノートを確認することができる。これらは「清沢満之の思想形成を探る資料」としての価値を有し、また「関係教育機関でどのような教育がなされたのかという近代日本教育史の資料」ともなるものである。

本研究では、『全集』及び別巻に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っている。

これらの未公開文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものである。

執筆時期も分野も内容も多岐に及び、すべてを公開することは一朝一夕に実現可能なことではないが、貴重な清沢満之自筆文献の影印を預かる本研究が継続的になすべき研究であり、その内容精査とともに公開に向けた研究活動を継続している。本年度は、3カ年の研究期間の2年目にあたり、初年度に着手した西方寺所蔵文献についてその全貌を再確認する研究を継続して行った。具体的には、次の二点を柱とした研究である。

- 1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
- 2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

以下に、その活動概要について述べる。

■活動の概要

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。

3カ年の研究計画に挙げた西方寺所蔵文献リストの作成に向けて、基礎的な文献確認作業を継続した。この確認とともに、各文献の執筆年時、性格、内容を踏まえた解題を作成し、執筆年時が判明したものについては、清沢満之の年譜にプロットしていく作業を並行して行っている。

その概要は、次の三点である。

- 1、西方寺所蔵文献のリスト整理
- 2、未公開文献の校正・整理・解題等作成
- 3、その他

- 1、西方寺所蔵文献のリスト整理

本研究は、西方寺所蔵文献の調査時の調査カードをもとにした文献リストを所有し

ている。この文献リストは調査時に文献整理を目的として作成したものであり、文献ごとに通し番号を付し、それぞれの形態や法量などの詳細を記録したものである。しかし、旧来の文献リストでは、本研究が所蔵する各写真のいずれが『全集』収録・未収録かについて整理されていない。

昨年度に引き続き、それらを明確に判別したリストを新たに作成する作業を継続的に行った。旧来の文献リストは写真フィルム番号ごとに整理されているが、それでは全貌を把握していくには十分とは言えない面があり、フィルム番号内の写真番号（以下、写真番号と略）ごとに詳細に分類した新たなリストを作成する作業を行っている。

この方針に基づいて、以下の二つに分類して西方寺所蔵文献の新たな文献リストを作成しその充実をはかっている。

I. 『全集』収録済文献リストの充実

II. 『全集』未収録文献リストの充実

I. 『全集』収録済文献リストの充実

『全集』収録済の西方寺所蔵文献リストを整理し、『全集』の収録巻・頁と写真フィルム番号・写真番号が対応するよう確認する作業である。『全集』に掲載された文献が西方寺所蔵文献の写真フィルム内のいずれの写真番号の文献に基づくかについてのより詳細なリストを作成することで、その対応関係を容易に確認することが可能となる。

この作業については、本年度内に、『全集』および別巻収録済文献のすべての写真フィルムについての作業を終えることができた。

II. 『全集』未収録文献リストの充実

『全集』等に未収録の未公開文献について確認していくために、その詳細な分類リストを作成する作業を昨年度に引き続き行った。西方寺所蔵文献には、一つの文献内に性格の異なる記述が複数存在するものを多く確認できる。

例えば一冊のノートにも和文文献と英文文献やメモ等が混在しており、その内容を一つの文献としてリストに記載することは適切ではない。旧来の文献リストはそれらを明確に分類するものではなく、未公開文献の詳細を把握する上では十分ではない面があった。そのためノート内の記述ごとにその内容が区切られると考えられ得る箇所区分し、文献名称の有無等を基準とする種別を示す分類記号を定めリストに記載していく作業を行った。

この作業については、本年度内に、対象のすべての写真フィルムの確認作業を終えた。

*上記の通り、同じ写真フィルム内に『全集』収録・未収録の文献が混在している。そのためI・IIの作業で重複して確認したフィルムがあり、今年度、実際にI・IIで確認したフィルム数は107本分である。

2、未公開文献の校正・整理・解題等作成

未公開文献の各文献内容を把握していくために、上記したリスト作成と並行して、

文献ごとの内容確認を踏まえた簡易的な解題（200字程度）を作成し、さらには文献内の目次を付す作業を昨年度に引き続き行った。文献ごとの性格（講義筆録、メモ、目録、索引等）、執筆時期、執筆経緯等を把握していくことを目的とした研究活動である。

これらの作業において新たに執筆時期を確認できた文献がある。それらの成果を清沢満之の生涯と思想の研究に反映していくため、『全集』第9巻に掲載する清沢満之の年譜に、その情報を加えていく作業を行っている。これにより、これまで明らかになっていない清沢満之の生涯における事績や思想形成過程についても明らかにすることができるものと考えられる。

これらの作業は、概ね以下の三点に分類できるものである。

- I. 未公開文献の内容確認
- II. 解題・目次の作成
- III. 年譜の作成

文献内容の確認作業に際しては、未公開文献の写真と翻刻資料に基づいて丁寧に把握する作業を行った。解題・目次を作成する際には文献内に記される情報（執筆時期、講義筆録と思われる文献についての講義担当者、テキスト名等の書誌的な情報）を確認しつつ文献内容・性格等を明確にしていく作業を行った。本年度は写真フィルム65本分について作業を行い、対象となるすべての写真フィルムについての確認作業を終えた。

また、未公開文献内には清沢満之の学生時代の記録が多く残されている。これらを年譜に反映させていく作業では、各年の事績と並行して各在籍年度、期別ごとにその事績をあきらかにできるよう年譜の作成を進めた。これらの作業を通して、清沢満之の育英教校時代、帝国大学時代等における思想形成の一端を明らかにすることができるものと期待される。

3、その他

上記した1、2については、検討事項を隔週ごとのミーティングにおいて確認しつつ、年3回の全体会議にはかり、確認作業をすすめた。その日程等については『所報』の彙報欄にて報告する通りである。

2022年度までに、すべての文献について基礎的な確認作業を終えることができたが、その過程で、各文献についての執筆時期等、個別に調査すべき課題も見ついている。年時を確定することが困難と考えられるメモ、文字の練習等の記述もあるが、2023年度はできるだけ、それらを確定する作業を重ねていく。検討内容の詳細については、本研究の研究成果として、本研究所『紀要』等にて報告していく予定である。

大谷大学所蔵仏教写本研究

大谷大学には、パーリ語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究

されていないものも多く残っている。大谷大学所蔵の写本の中の1900年にタイ王室から寄贈されたと思われるクメール文字、ビルマ文字とモン文字で書かれたパーリ語貝葉写本群が日本最大級のものと言われ、研究者の注目を浴びる。

本研究は、これらの写本の保存、整理と利便性、そして学術研究の準備を整えることを主な目標とする。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、上記の『貝葉写本目録』のデータベース構築、写本が含まれていたと思われる包み布の研究、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に作業を行なう。そのために必要な資料を収集する。これに加えて、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアを中心にその文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことおよび関連資料収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指すことも目的とする。

このような目的を達成するために2022年度は以下の研究活動を実施した。

①ローマ字転写テキスト作成

クメール文字の一部の写本のローマ字転写テキスト (Diplomatic Edition) の作業を開始し、現在継続中である。完成したテキストをデータとして研究者に提供する予定である。そのため、2023年3月18日(土)～2023年3月27日(月)までタイのDhammachai Instituteを訪問し、Suchada Srisetthaworakul 嘱託研究員およびその他複数名のネイティブの研究者の協力を得、文字確認作業を行った。それと同時に、Dhammachai Instituteの独自の技法による文字入力、写本の内容の比較などの作業の見学を行なった。これらの技法を習得し、今後本研究班の作業に活用する予定である。

②国際ネットワーク構築

2022年9月9日(金)～2022年9月15日(木)までタイへ赴き、本班の嘱託研究員のSuchada Srisetthaworakul博士の協力のもと、現地の研究者との共同研究や本研究班の研究の協力について話し合った。

マヒドン大学、マハムクト仏教大学、シルパコロン大学の研究者たちから積極的な反応が得られた。パーリ語、写本研究および東南アジアとりわけタイの宗教文化に長年研究されている国際的に著名なPeter Skilling博士と会い、本研究の趣旨を説明し、今後の指導をお願いした。博士に写本校訂について貴重なアドバイスをいただいた。大谷大学所蔵のタイからの貝葉写本の研究を現地の研究者およびその他の研究者たちの協力を得ながら行いたく、今後も研究者同士のネットワークの構築を続けていく予定である。

2023年2月27日(月)～2023年3月2日(木)まではインド中央政府の文化省 (Ministry of Culture) のもとにあるNational Mission for Manuscripts (以下、NMMと略す)において研究活動を行なった。今年20周年を迎えたNMMは様々な写本の研究、教育、保存、修復、そして若い研究者の育成など幅広い分野で写本に関する教育・研究をサポートするインド最大の国立機関である。詳細について当機関の公式ウェブサ

イト (www.namami.gov.in) を参考にされたい。

研究班の研究目的や研究活動を国際的に公にするために以下の3回の研究発表を行った。

(1) 発表題名：Manuscript Studies: A Tool to Understand the Culture of South and South-east Asia (インド・Woxsen 大学主催オンライン国際シンポジウム 'Situating South Asia in the Global Academic Discourse' において。発表日：2022年12月1日)

(2) 発表題名：“Buddhist Manuscripts and Its Studies: A Glimpse of Otani University Collection” (オンラインシンポジウム 'National Seminar on Manuscript Heritage of India: Its Past, Present and Future' において。発表日：2022年12月24日)

(3) 発表題名：“Indic Manuscripts in Japan” (National Mission for Manuscripts において。発表日 2023年3月1日)

③データベース構築

東南アジアのパーリ語仏教写本の Descriptive Catalogue である『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』大谷大学図書館出版(以下、『大谷貝葉目録』と略す)が1995年に出版されている。当目録はその当時の特別な技法と機材を用いて刊行されたが、それは現在のパソコンやソフトウェアに対応しないようである。そのため、目録のデータ入力が必要不可欠である。デジタル入力の完成後、研究の利便性を図るため、データベースを構築する。

ゆえに、インド東部・オディシャ州のブバネシュワルに位置する大谷大学の協定大学である Kalinga Institute of Industrial Technology (KIIT) 大学の Computer Science 学科の教員2名と15名の学生たちから協力をいただき、本データベース構築作業を実施する予定である。そのために2023年2月に現地へ赴き、本班貝葉写本目録のデータベース構築に関して説明会を開催した。Excelで入力されているデータを見やすい形でレイアウトを作成し、検索できるようにすることを KIIT 大学の教員や学生たちの協力を得て実施する予定である。

④ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究

写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、2021年度よりハイデルベルク大学の Department of Cultural and Religious History of South Asia と提携して立ち上げた「Manuscriptology and Digital Humanities」という共同研究プロジェクトのもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催している。2022年度は zoom を用いて合計7回実施した。

○第1回公開講演会

題名：Presentation of the Muktabodha Indological Research Institute

発表者：Dr. Borayin Larios (University of Vienna)

○第2回公開講演会

題名：Jam Today: Managing Large Manuscript Traditions with Digital Humanities Tools

- 発表者：Prof. Dr. Dominik Wujastyk (University of Alberta)
- 第3回公開講演会
題名：Palm-leaf Manuscripts in Southeast Asia: Demonstration of Creating a Database of Pāli Tipitaka (Survey, Digitization and Transcription)
発表者：Dr. Suchada Sriseththaworakul (Mahidol University)
- 第4回公開講演会
題名：Editing the Śivadharma Corpus
発表者：Florinda de Simini (Università di Napoli L'Orientale)
Dominic Goodall (EFEO, Pondicherry)
Csaba Kiss (Università di Napoli L'Orientale)
Kengo Harimoto (Università di Napoli L'Orientale)
- 第5回公開講演会
題名：Two Sets of Digital Tools for the Study of Chinese Buddhist Texts
発表者：Prof. Michael Radich
(Professor of Buddhist Studies, HCTS, Heidelberg University)
- 第6回公開講演会
題名：When Dealing with a Hundred Pāli Manuscripts: Editing Subhasutta of the Dīghanikāya
発表者：Dr. Bunchird Chaowarithreonglith
- 第7回公開講演会
題名：Documenting and Editing Inscriptions from the Kathmandu Valley and Beyond
発表者：Manik Bajracharya & Rajan Khatiwoda
(Heidelberg Academy of Sciences and Humanities)
- これらの講演の詳細について <https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html> を参照されたい。

大学史資料室

大谷大学史資料室は、大谷大学の公文書および大学の歴史に関する資料の収集、整理・管理を主な目的としている。そのほか、所有する資料の貸出依頼や閲覧依頼等の対応も行っている。

大学史資料のほかにパンフレットやノベルティなど大学発行物を保管していくことも目的としている。

2022年度の主な活動として、①所蔵資料および寄贈資料の整理、②所蔵資料・データ調査・資料貸出、③所属している研究会への参加を行った。

①所蔵資料および寄贈資料の整理

本資料室が所蔵する資料、特に大判写真について保管場所の整理を行った。また、他機関からの寄贈図書、パンフレットの受入れ、整理を行い、その図書目録や機関の

住所録を作成した。

②所蔵資料・データ調査・資料貸出

学外から1件、所蔵資料に関する問い合わせがあり、所蔵資料2点の貸出を行った。

③所属している研究会への参加

関西大学千里山キャンパスにて、2022年5月25日（水）に開催された全国大学史資料協議会西日本部会2022年度総会・第1回大会に出席した。また、同日に開催された関西大学博物館特別展示室見学会にも参加し、他大学における大学史資料の管理・活用について知見を深めた。

デジタル・アーカイブ資料室

デジタル・アーカイブ資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化したデータの整理・保管および研究資料としての公開にある。2022年度の主な活動は大谷大学図書館古典籍のデータベース構築である。

大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースについて、今年度も登録作業を進め、今年度分とこれまでの分と合計すると公開準備件数は601件となる。また、2023年3月時点での古典籍公開件数は17,365件となる。

なお、本年度より「大谷貝葉」に関する取り組みは大谷大学所蔵仏教写本研究へ移管した。

東京分室指定研究

多様な価値観を内包する現代社会において、新型コロナウイルスの世界的流行を始め、私たちは生活様式など様々な変化を強いられているが、宗教のあり方もまた問われている。また現代社会において、宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も強まっている。本研究の目的は、そうした現代社会が内包する諸課題について、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すことである。特に2022年度の研究計画では、「現代社会における宗教と共生」をサブテーマに設定し、特に「共生」という鍵概念を手がかりに、私たちと宗教の多様な関係を考察し、現代社会における宗教の役割の解明を念頭に置いて取り組むことを課題とした。以下、その具体的取り組みと成果を概観したい。

本研究の取り組みは、大きく二つのアプローチからなされている。①各研究員の各自のディシプリンに基づく研究課題に関する取り組み、②室長が主導し、全研究員が共同で実施する取り組み、である。

①の一つ目として、各研究員を研究班の代表とする取り組みがある。この具体的な内容については、各研究員の個人研究班の取り組みとして本所報に報告しているので、参照されたい。東京分室内では、年度初めに、各研究員が集まり、各自の研究の取り

組みの振り返りと新年度に向けた研究計画を報告する時間を設けている。そこでは、各研究員が、報告内容を踏まえて自由に意見交換を行い、各自の研究活動の向上に繋げると共に、共同研究を進めていくための有益な情報交換を行っている。

①の二つ目として、各研究員が、各自の研究課題の検討を目的に企画の中心を担当して実施する【公開シンポジウム】と【公開研究会】がある。2022年度は、それぞれ一回ずつを開催することができた。

【公開シンポジウム】であるが、荻翔一研究員が中心となり、企画を担当し開催した(2022年11月26日〈土〉・ハイブリッド開催)。テーマは、「宗教と多文化共生—「在日コリアンの宗教」の現在—」。荻研究員自身の研究課題は、特に在日コリアンと宗教の多様な関係のあり方を明らかにすることであるが、本シンポジウムも、荻研究員の研究課題の検討を目的に、4名の研究者を招聘し、開催された。宗教、特に在日コリアン(特に一世)が中心だった宗教が、現在、いかなる変化を遂げ、どのような取り組みをしているのか。従来の研究にはない宗教者や宗教団体への視点を導入し、「多文化共生」の取り組みにおける宗教の固有の役割やその特徴の検討を行うことができた(詳細は、『研究所報』82号20～21頁を参照のこと)。コロナ禍の中ではあったが、大谷大学メディアホールを会場に、対面とオンラインとのハイブリッド形式で開催し、学内の教職員や学生も対面で参加してもらうことができた。

【公開研究会】としては、陳宣聿研究員が中心となり、企画を担当し開催した(2023年2月13日〈月〉・オンライン開催)。テーマは、「胎児の『人格』とスピリチュアリティ」。陳研究員自身は、現代における胎児観の変容と宗教との関わりについて研究しており、本公開研究会も、陳研究員の研究課題の検討に沿う形で開催された。報告者の橋迫瑞穂氏(大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター(UCRC)研究員ほか)は、女性のスピリチュアリティに関する研究に取り組んできた社会学者で、著書に『妊娠・出産をめぐるスピリチュアリティ』(2021年、集英社)がある。橋迫氏によれば、出生前の胎児にも「人格」が想定され、「妊娠・出産という極めて私的な体験が聖性を付与される一方で、聖性を帯びた「母性」を身に着ける体験として妊娠・出産が意味づけられることでジェンダー規範との葛藤をもたらしてきた」(本誌掲載の開催報告)という。そして、この「聖性」が、スピリチュアル・コンテンツと結びついていくのだという。45名の参加者があり、報告後の質疑応答も熱心に行われ、議論を深めることができた。

本所報の「彙報」にも記載しているように、これらの公開シンポジウムと公開研究会の開催にあたっては、テーマを深められるよう、東京分室内において数度の事前勉強会を実施し、準備を進めた。この勉強会では、登壇者の著書や論文、報告者の著書などを取り上げ、各研究員が分担して報告し、議論しつつ課題を共有することに努めた。上記の公開シンポジウム、公開研究会とも、多様な価値観を内包する現代社会における宗教の多様なあり方や現れ方について、新たな知見を得ることができた。またそれらの知見を多くの参加者と共有し、検討することができた点は、大変有意義であった。

次に②の室長が主導し、全研究員が共同で実施する取り組み、について。指定研究の研究課題を検討することを目的として、具体的には、現代沖縄における宗教事情をテーマに取り上げ、全研究員が参加し、沖縄への現地調査を実施した。調査内容の詳細は、本所報〇～〇頁を参照されたい。

調査に先立ち、東本願寺沖繩別院職員で法政大学沖繩文化研究所国内研究員の長谷暢氏を招聘し、研究会を実施した。長年、沖縄県内において僧侶として布教活動を実践されてきた経験を踏まえたところから、「沖繩別院の歴史と取組み紹介」と題して、報告をいただき、質疑応答を通して、沖縄における真宗布教の歴史と現状について理解を深めることができた。

現地調査では、波上宮・護国寺・外人墓地・那覇バプテスト教会・日本キリスト教団佐敷教会・東本願寺沖繩別院・西本願寺沖繩別院・国立ハンセン病療養所愛楽園・金城実氏アトリエを訪れた。特に、長谷氏が、日頃交流されているキリスト教教会や西本願寺沖繩別院の方々の他、葬儀社の方への連絡調整を担っていただいたことで、大変充実した調査を実施することができた。この場を借りて、長谷氏をはじめ、調査にご協力をいただいた方々に御礼申し上げたい。

調査現場では、各研究員が分担し、聞き取り調査を実施したが、各々が、それぞれの研究課題に引きつけながら、沖縄の宗教事情について考えるヒントを得ることができたと思う。

この調査を通して印象に残ったことを幾つか挙げておきたい。例えば、本土では、檀家制度という江戸時代から続く寺院と信徒との関係が自明となっているが、沖縄では、そうした寺院と信徒との関係は存在しない。それ故に、布教活動を始めた寺院や僧侶のあり方は、本土と同様というわけにはいかないので、様々な工夫や取り組みがなされている。東本願寺沖繩別院では、遺族へのグリーンケアの会を定期的に開催し、また供物の菓子を子ども施設へ寄附する活動を続けているという。護国寺の前住職への聞き取りでは、戦後早くから始まった宗派の垣根を超えた沖繩仏教会の平和への取り組みについて知ることができた。那覇バプテスト教会では、隣接する保育園の屋根に米軍ヘリの部品が落下した事件を契機として始まった、園児の保護者共々の基地への抗議活動について話を聞くことができた。基地問題については、沖縄のキリスト教界も仏教界も一致団結して取り組んでいるという。本土の宗教事情とは異なる沖繩独自の宗教事情を考え、合わせて、所謂外来宗教としての浄土真宗が、キリスト教が、どのような受容の歴史を辿り、現在に至るのか。そのようなことを考える上で重要なヒントを得ることができたように思う。最後に訪問した金城実氏とは、私自身、毎年のようにお会いし、お話しを聞く機会に恵まれてきたが、今回は、各々の研究員にとって初めてのアトリエ見学であり、金城氏との邂逅の機会となった。各研究員が、一人ひとり順番に、各々の研究テーマを中心に自己紹介をする時間を持つことができた。芸術家であり社会活動家であり、琉球親鸞塾を主宰する御年85歳となられた金城氏と初めて対峙した各研究員が、皆、緊張しながら氏のアドバイスの言葉に真剣に耳を傾けていた姿が印象に残っている。

今回の調査に際しては、各々の研究員が、宗教と共生という本指定研究の研究課題を検討していくためのヒントを何か一つでも掴んでもらえたら、という期待を抱いて実施したが、本所報掲載の各研究員の調査報告に目を通しつつ、その期待は叶えられたのではないかと感じている。むしろ、共同研究という点では、まだそのわずか一步を踏み出したばかりである。今後も継続的に沖縄への調査を実施しつつ、研究課題について検討して参りたい。

最後に、東京分室長としての一年間を振り返ってみたい。着任当初より江森英世真宗総合研究所所長から東京分室の運営面の課題としてうかがっていたのは、コロナ禍のためもあり、この数年、東京分室の研究活動を大谷大学内で認知してもらえる機会が少ないということであった。合わせて、各研究員にも、東京分室の母体である大谷大学のことを、知ってもらえたら、とも思い、この一年間を通して、意識的に大谷大学内の施設で、公開シンポジウム、研究成果報告会等を開催することを試みた。東京分室と各研究員の研究活動等に関して、学内での認知度の上昇に繋がれば、幸いである。加えて、本学大学院の「プレFD実践演習」という授業で、2名の東京分室の研究員がゲストスピーカーに招聘され、研究活動等について紹介させていただいたことは、更なる研究活動の場を求めようとする院生に東京分室の存在と取り組み内容を知ってもらう良い機会となった。当該授業担当の村山保史教授に、御礼申し上げたい。

何はともあれ、あっという間の一年間であった。東京分室の主役である各研究員の活躍を応援しながら、試行錯誤を継続して参りたい。